

令和4年度中学生・高校生の国際理解・国際交流論文

高等学校の部 最優秀賞



「異なる視座に立つことの重要性

～国際社会を生きるために～

福島県立会津学鳳高等学校

1年 中村 文彬

この夏、私は日本、中華人民共和国、台湾、香港の計4つの国や地域から集まった高校生たちとオンラインセッションをする機会を得た。それぞれの地域の歴史・文化について互いに共有しあった。国籍関係なく趣味の話をし、日が変わっても雑談に熱中し続けた。本当に楽しいかけがえのない素晴らしい時間だった。

しかし、メンバーとの会話の中で緊張が走る場面があったのだ。福島第一原子力発電所の処理水の海洋放出に関する話題が出たときに、中国メンバーの一人が

「処理水は海洋生物に悪影響を及ぼすので、日本政府は排出をやめるべきだ。」

と発言したのだ。何の躊躇もなくそのようなことを言う彼に私は驚いた。この問題は単純ではないはずだ。処理水の排出には反対だと軽々しく発言してほしくなかった。幼少のころに起こった原発事故は未だに私の住んでいる地域では生々しく、震災によって避難した経験を持つ者としても、簡単に触れられないと思っていたからだ。新聞などで少しかじったような知識の彼に何が語れるのか、何がわかるのか、と憤慨したのはプログラム終了後だ。地元の問題について第三者が何か語っているのを見たのは、この時が初めてだった。私は想定外の意見を耳にしたことに困惑し、自分の意見の整理が間に合わなかった。

二つ目の緊張は台湾海峡問題だ。プログラムの日程の最中に、米国民党のナンシー・ペロシ氏が台湾を訪問した。その事件が台湾の高校生と中国の高校生の間大きな亀裂を生じさせたのだ。実際、その日を境に二人の間の雰囲気は変わってしまった。台湾側は、中国の軍によって攻められるのではないかと過剰に怯えていた。対して中国側は、台湾側が自国の政府のことを不必要に悪く言っていて、不公平だと主張していた。対立はエスカレートし、相手に対して攻撃的なことを口にする人も現れた。これまで築き上げた関係が目の前で壊れていくのに自分には何もできない辛い時間だった。

あのとき、私は福島で生活する高校生の一人として何を言えばよかったのか？そして中国と台湾の確執に第三者である日本人として私には何ができたのか？プログラム終了後も私はこの問題について、考えを巡らせた。そしてたどりついた答えはこうだった。一見関係のないように見えたこの二つの問題は、共に同じ原因、つまり異なる視座に触れる機会が少ないことに帰するのだ。この問題の解決にアプローチするカギ、それは「人間関係における多様性」だ。それは、これからの日本社会が最も必要としているものだろう。

人間関係における多様性を考えるための例として、私がドイツ人の先生と英語のレッスンをしていたときの経験を挙げさせていただきたい。その日は慰安婦問題についてディス

カッションをしていた。私は、確かに日本は悪いことをしたが、今の世代がその責任を負う必要はないし、一方的に責められるべきではないと言った。しかし、返ってきた反応は、私の期待に反するものだった。

「日本は世界の女性に半ば強制的に慰安婦になることを強いた加害者であると私は考えているし、国際社会の評判も同じようなものであると思う。日本人であるあなたもまず、なぜ責められるのかを考えるべきなんじゃないかな。」

最初は受け入れ難かったが、よく考えてみると一理ある意見だと思った。日本政府は他国に公平な対応をしているという私の意見は、日本国内の情報ばかりに触れていたことによるバイアスがかかったものかもしれないと気が付いた。私は彼女のアドバイスをもとに、加害者としての日本について調べてみた。着眼点を変えて探すと、思ってもいなかった別の視点からの記事、参考文献が見つかったのだ。果たして私は、「日本はこれまでの自らの非を矮小化するのではなく、過ちは謝罪しなければならない。そのためにも、日本は国際社会からの提案に耳を傾けるべきだ」と意見をまとめた。彼女も今度は納得してくれた。誰でも、自分の意見を否定されたら居心地の悪い思いをする。それは当たり前だ。私は自分の考えに対する肯定的なコメントを待っていたのだ。だから彼女の異なる視点からの意見は耳が痛かった。しかしながら大切なのは、違う立場の人からの意見を積極的に求めるのをやめないことだと知った。多様性は概して想像を超える恩恵を私たちにもたらしてくれるからだ。

国や会社のような規模の大きい組織にとっても、異なる視座にふれること、そこから受ける価値、恩恵は人間関係におけるものと変わらない。会社は積極的に異なるルーツの人々の採用に尽力すべきだ。しかし日本には移民が少ない。2015年の日本における入移民の割合は1.7%。それに対しドイツは12.5%、フランスでは12.3%、イギリスでは12.9%だ。どの国も日本とは大きく差がある。日本は人種的な多様性を大きく欠いているのだ。

バックグラウンドの違う人を受け入れるだけで、組織内の雰囲気は大きく変化する。実際にそのメリットを科学的に示した調査がある。経済学者チャド・スパーバーの実験によれば、特定の業務(司法業務、保健サービス業務、金融業務)において、職員の人種的多様性が平均から一偏差値上がっただけで、25%以上生産性が高まったという。他の研究者も同様の結果を数々報告している。理由は前述の通り、他者から新しい視点を与えられるからである。

利害の衝突による国際問題が相次ぐ現代社会。原因は、日本が、そして世界がグローバル化によって重要度を増してきた「多様性」との付き合い方を未だ見つけあぐねている点にもある。本論文で私があげたのは、私の個人的な体験、つまりマイクロな例だが、マクロな現象である国際問題も、原因を突き詰めればこれらの例に通ずるところが多いと思う。多様性を受け入れること。言葉にするとこれだけだが、本当に実行しようとするとなかなか難しい。人は自分の視点、身近な意見ばかりを意識してしまうからだ。

だが、今から意識し始めても遅くはない。異なる存在、意見を求めにいくこと、自分を否定されることを恐れずに様々な意見に耳を傾け、どの視点も同様に尊重すること、そして、他人が感じるもの、考えていることを想像する、いわゆる「他人の靴を履く」こと、これらが、この夏の経験で私がたどりついた、私がこれからの国際社会で生きていく上での個人的な指針であり、地球上から紛争をなくすための国際社会への提言である。

参考文献

- 「多様性の科学 画一性で凋落する組織、複数の視点で問題を解決する組織」
マシュー・サイド 株式会社ディスカバー・トゥエンティワン
東京大学 https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/features/z0508_00023.html
- 「地図とデータで見る 人口の世界ハンドブック」 ジル・ピゾン 株式会社原書房